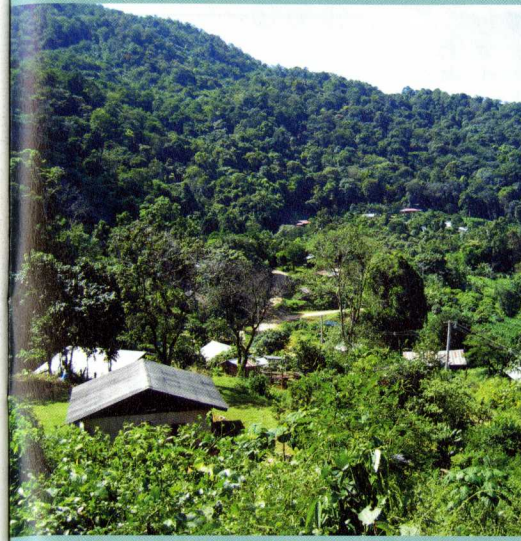


木 森

環境破壊が深刻化する今、森林も減少の危機にさらされている。人は森に多くの恩恵を求め、そのかわり方もさまざまである。特集では、人と森がどのような関係を作ってきたのか、これからどう共存していくべきかを考える。



モンスーン林に囲まれた山村(タイ)



ピキン川の森を行く(ロシア)



森の民の居住地まで押し寄せた伐採の波(コンゴ)



民家やサマーハウスの周囲には必ずといっていいほど白樺が植えられている(フィンランド)

森と人

佐々木 史郎

(ささき しろう)

本館研究戦略センター

恐怖も与える空間

「森林浴」ということばがあるように、森には人の心と体をリフレッシュさせる働きがある。特に都会で仕事や人間関係に疲れ果てている人には効果が大きい。森の緑は目に優しく、鳥の声や川のせせらぎを聞いていると、自然と心が落ち着く。森のなかに開けた日だまりのなかに座っていると、じつじつと静かになる。

しかし、森にしばらくいると、何か落ち着かなくなるようなことはないだろうか。都会のなかの小さな公園の森などではありえないが、どこまで歩いても車の音はあるか、人の話し声も、ときには鳥の声を聞かなくなるような場所に入ったとき、何か背筋が寒くなるような感覚を覚えたことはないだろうか。この先に進んでい

ものかどうかが、あるいは同じ道を引き返して、きちんと元の場所に戻るのかどうか心配になったような経験はないだろうか。それは未知の場所に対する不安からくるものであるが、その不安感、あるいは恐怖感はその生ずるわけではない。森に生まれ、その森を子どものころから歩いてすみずみまで知り尽くしているはずの猟師ですら、森に対して畏怖あるいは恐怖を覚えることがあるという。森は人びとに資源や安らぎを与えるだけでなく、恐ろしいものも含めてさまざまな想像力も喚起するのである。

わたしが近年しばしば訪れている極東ロシアの先住民族であるウデヘヤナーナイの猟師たちも、森ではたびたび恐ろしい経験をしている。それはトラやクマと直面するという現実的な恐怖だけではなく、精神的あるいは霊的な恐怖である。例えば、猟に出て森で野営すると夜に不審な物音を耳にする。あるいは、急に寒気や髪の毛が逆立つような感覚に襲われたり、悪夢にうなされたりする。そのようなときには必ず何らかの悪霊が彼らに接触しているという。他方、森には悪意をもった霊だけでなく、適切に対応すれば人びとを助けてくれる霊もいる。ピキン川のウデヘたちは猟運を支配するラオバトウを信じて、狩りの前には必ずウオツカを捧げ、丸木船を作るために木を切り倒すと、木の霊に対する謝罪と感謝の

気持ちをもって、切り株の上に小枝を立てる。

森との共存共栄

森をよく知る人ほどそのなかに霊的なものを感じる。しかし、猟師たちはそのような霊たちとの緊張関係を楽しんでいる風でもある。彼らは森の楽しさと恐ろしさのバランスの上に立って、その資源を使わせてもらっているのである。

材木を切り出すために木をすべてなぎ倒して森を破壊したり、あるいは逆に森を有効に使わずに放置したりするのは、

人が森との関係を見失ったからである。あるいは森の霊たちの存在を見失ったからである。いま、日本では人間が森に対抗する力を失いつつある。クマやシカ、サルなどが人里にあらわれて被害をもたらすのは、森が人間世界に迫っていることを意味する。しかし、森との関係を見失った人間たちの世界に森が入り込めば、双方とも無用の傷を負うことになりかねない。それを防ぐためには、科学技術で森を支配しようとするのではなく、伝統と経験に培われた猟師や林業関係者の知識を活かして、人と森が共存共栄できる状態に戻る必要がある。



ピキン川河岸にある聖地スワンタイ・ミオの崖、猟運を司るラオバトウという精霊が祭られている



切り株に小枝を立てるウデヘの猟師

日本の森世界

山田 勇

(やまだ いさむ)

京都大学名誉教授

心の安らぎの源

「日本の森は、こじんまりしているが、存在感がある」という想いがこのところ徐々にふくらんできている。

若いころの金閣寺の裏山を皮切りに世界の森を見るかたわら、日本の森も北山から北アルプスにはじまり、南は西表のマンングローブ、屋久島の屋久杉、宮崎の綾の森、魚梁瀬の千本杉、大山のブナ、京都の北山スギ、白山のブナ、赤沢のヒノキ、東北のブナや秋田杉やヒバ、そして、北限の歌才のブナや、北海道の針葉樹林帯ほか、名もない森も多く見てきた。そこには、たとえば北米太平洋岸の巨大林や、アマゾンの熱帯林のように無限に広がる大きさはないが、どこかしつかりとこのった美しさを感じさせるものがある。

日本の森には、何か人の心を落ち着かせる雰囲気がある。限られた空間のなかにただよっていると想う。

それは、ヨーロッパの古都の歴史地区に入ったときの気持ちにも通ずる。クラコフ、ハイデンベルク、チェスケークルムコフ、パレルモ、ピサなど、ヨーロッパには無数とあっていいほどの美しい小さな都市が点在する。そのひとつひとつに足を踏み入れ、石畳の道を歩みつつ、まわりの古い民家や城を見上げるときの気持ちは、ちよつと、日本の森を歩いてブナや杉、ヒノキをながめるときに感じる心の安らぎと同じである。

そこに共通するものは歴史の重さである。人は、長い歴史の前には謙虚にならざるをえない。都市には人間の歴史がぎざまれ、森にはより長い生命複合体の歴史がある。一本一本の木の寿命は短いようだが、それでも、人間の数倍から数十倍の年月を生きている。そして、単に一個体だけではなく、森というひとつの共同体のなかに無数の生命がやどっているのである。それは古い歴史都市のなかで生きてきた人びとの生活と同じである。どちらにも、内に長いさまざまな生命体の生活史が隠されているのである。

人類の未来を示唆

日本を含め、今世界は大きな曲がり角

沃な三日月地帯は現在では一木一草もない荒野に変わってしまった。

これに対し、魚を食べる稲作漁撈民は森と水の循環系を守った。魚は川に水が流れていなければ生きられない。川に水を確保するためには、森を守らなければならない。こうして稲作漁撈民はタンパ

ク質を魚に求めたことによって、森と水の循環系を守ることになったのである。

持続性の高い循環型

これまで我々は、森を破壊し尽くした稲作牧畜民の文明のみを文明と定義して

にさしかかっている。これからの世界をどう考えていけばいいのか、これは今を生きる我々に課された大きな問題である。森の重要性が叫ばれた一九八〇年代から、今はどちらをむいても戦争や内戦、難民などの話題が優占している。こういふときにこそ、森のなかへ入り、じっくりと

未来を考えなければならぬ。森のあらたな役割は豊かな生命のいとなみによって、これからの人類の生きるべき方向を示唆してくれることではないだろうか。そのために手近に格好の場を日本の森は提供してくれている。



特集 木 森

森と文明

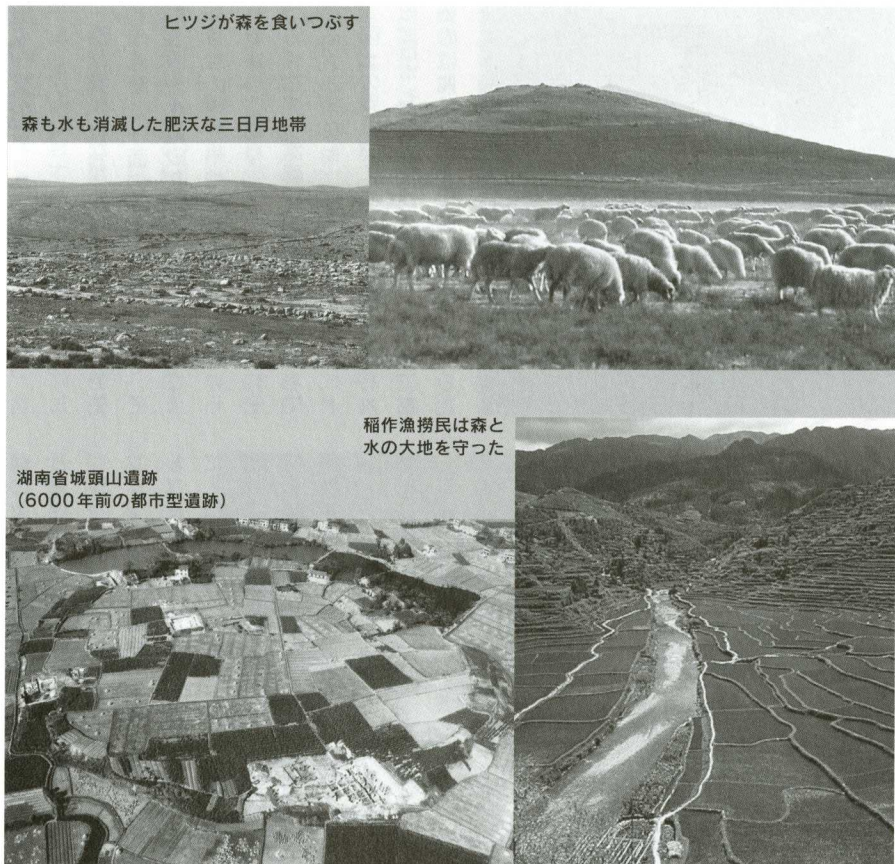
安田 喜憲

(やすだ よしのり)

国際日本文化研究センター教授

森と文明との関係

文明には森を破壊しつくした文明と森を守る文明がある。その森と文明の関係の相違は、人間が何を食べるかによって生まれた。とりわけタンパク質として何を摂取するかによって森と文明の関係は大きく異なるものとなった。端的に言えば肉を食べるか魚を食べるかによって、森と文明の関係は根本的に相違する道を開いたのである。肉を食べるミルクを飲んでバターやチーズを食べる畑作牧畜民の人びとは、森を徹底的に破壊する文明を創造した。畑作牧畜民が森を嫌いだっただけではない。森を破壊したのはタンパク源となったヒツジやヤギたちである。ヒツジやヤギは人間が寝ている夜のあいだにも草木を食べ尽くす。こうして、肥



きた。メソポタミア、エジプト、インドス、黄河の四大文明はまさにパンを食べ、ミルクを飲み、肉を食べる畑作牧畜民が作り出した文明である。そしてその畑作牧畜民の文明が繁栄した後は、森のない荒野に変わり果てた。それは何も古代だけではない、ヨーロッパは畑作牧畜民の大開墾によって七〇パーセント近い森が一七世紀の段階で破壊されていたし、一六二〇年にアメリカにヒツジを連れた畑作牧畜民が移住してから、たった三〇〇年でアメリカの森の八〇パーセントが破壊されたのである。

これに対し、稲作漁撈民はこれまで文明をもたなかったとみなされてきた。ところが、近年の長江文明の発見によって、稲作漁撈民も立派な文明をもっていたことがあきらかとなった。その長江文明はミルクの香りのしない文明であった。森と水の循環系を持続的に維持した文明である。六〇〇〇年前の中国湖南省城頭山遺跡は、今でも豊かな水の大地が維持されている。それは不毛の荒野に変わってしまったメソポタミアの大地とは大きく相違している。稲作漁撈民はきわめて持続性の高い地球にやさしい循環型の文明を発展させてきたのである。

フィンランドの森

庄司 博史
(しょうじ ひろし)

本館民族社会研究部

ベテランになると
ひとめで食用キノコを
みわけ、瞬く間に
籠いっぱい
キノコが採集できる



白樺に囲まれた
湖岸のサウナ小屋。
フィンランド人の
原風景である



夏から秋にかけて、
都市近辺の森では、
ベリー摘みの人びとが
いたるところにみられる



木の文化

飛行機からながめたフィンランドの田舎の遠景は一面の緑である。やがて、その濃淡や水面のかがやきから、さまざまな植生の森や耕地、湖や河川が見られるようになり、やがて道路や湖岸にそって点在する家屋ががたをあらわしてくる。

国土の六八パーセントが森林といわれる。日本も森林面積がほとんど同値であるのは興味深い、世界的にも突出した

値のようである。しかし、森林と山がほとんど同義で、宅地や耕地に使えない山が森として残ったような日本にくらべ、フィンランドの森林は平坦な大地に果てしなく広がる。日本にわずかに足りぬ面積に人口が五二〇万人程度のフィンランドでは、南部をのぞき、人びとが広大な森林の端にしがみついて生きているという印象をもつても不思議ではない。事実、フィンランドの人びとの生活にとって森林はなくてはならないものであった。

しばしばフィンランドの文化は木の文化とよばれる。伝統的な家屋である丸太で組んだログハウスをはじめ、家具から食器までが木製であったのは驚くには値しないが、日本なら竹や藁で作るような靴や繊細な籠、曲げ物が白樺の樹皮、樺皮細工として発達したのは興味深い。針葉樹である赤松やトウヒがフィンランドの寒帯樹林を支配してきたのに対し、白樺林は家屋や耕地の周囲に二次林として勝手に育つ雑草のような存在であった。樺皮の採集はもちろん、長い冬のあいだ暖を提供し、料理のための燃料となったのは大量の白樺であった。白樺の樹液は甘い飲料となり、若枝を束ねて作るバスタでほてった肌をたたくのはサウナには欠かせない習慣である。ちなみに、近年歯を守る甘味料としてガムなどに用いられているキシリトールも白樺を原料としている。

森林は意外なことに穀物の栽培にも用いられた。一九世紀末まで東フィンランドに残っていた針葉樹林の焼畑である。針葉樹林のふんだんにあった近世、数十年の周期でおこなわれた焼畑は大量の収穫をのぞめる手段として全国に広がった。やがて生産性の低下と森林の荒廃をもたらし、禁止されることになったが、白樺林はそれとともに拡大したともいわれている。

万人の権利

現在、焼畑はいうにおよばず、樺皮にも燃料としても一般のフィンランド人には大して用いられなくなった森林だが、人びとのつながりは決して弱まってはいない。夏から秋にかけて森林でのベリー摘みやキノコの採集は、レクリエーションをかねた大きな楽しみだし、ベリーはジャムやジュース、キノコは乾燥物や塩漬け食品として結構家計もおぎなっている。フィンランドには国有林であれ私有林であれ、通行やベリーなどの採集の権利は認める万人の権利というのが慣習法としてあった。これは今、成文法としても存在する。彼らのこのころの抛り所としての森林の重要性が法律でも認められているということになる。

コンゴの森の民

市川 光雄
(いちかわ みつお)

京都大学アジア・アフリカ地域研究
研究科教授

生活を脅かす森林破壊

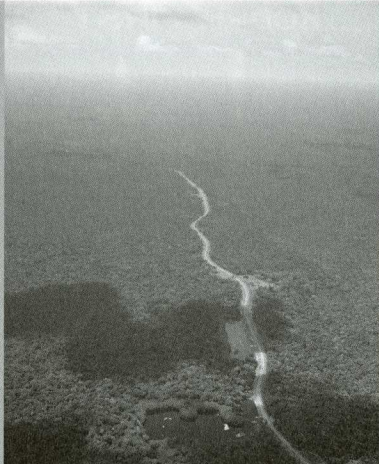
毎年、数百万ヘクタールの熱帯雨林を商業的伐採によって失っている中央アフリカでは、節度ある森林の利用と管理のために「森林法」の改訂が進んでいる。一九九四年にはカメルーンで「狩猟法」を含む「森林法」が改訂され、また二〇〇二年にはコンゴ民主共和国がFAO(国連食糧農業機関)等の援助により新しい「森林法」を制定した。改訂された森林法で謳われているのは、自然保護と持続的な伐採のための森林管理の義務化と伐採権収入の地方への配分、そして森林に対する慣習的な利用権の保全などであるが、この森で長年生活してきた住民にとってとりわけ重要なのが最後の問題である。森は彼らの食物、とくにタンパク源と

なる野生獣肉を供給してきた。また、病気が怪我の治療にはもっぱら森の植物の樹皮や根、葉などが薬として用いられてきた。毎日の燃料や建材のほか、ほとんどの物質文化の素材は森でえたものである。さらに、学校教育や近代医療へのアクセス、税金や罰金、そして結婚や葬式などの社会的義務に伴う支払いにあてる現金も、獣肉や蜂蜜その他の森の産物の販売収入に依存している。コンゴ民主共和国でのおおよその試算によると、このようにして利用される非木材森林資源の市場価値は年間およそ数十億ドルに達するが、一方、伐採による収入はせいぜい毎年一億五〇〇〇万ドルほどで、しかもそのほとんどはごく一部の人間の手に集中し、森の民がその恩恵をこうむることはほとんどない。逆に、国から伐採権をえた事業者が森林への入域料を要求する例さえあり、伐採事業は森の民をさらに周縁化しているように見える。加えて最近では、砂金やコルタン(携帯電話等に使われる半導体)の採掘のために森の外から人口流入が続き、森林破壊に拍車がかけられている。

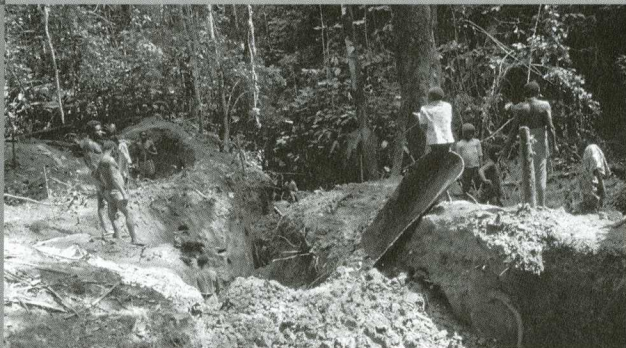
権利を求め団結するピグミー

このような状況のなかで最近、「ピグミー」とよばれてきた森の民が、コンゴの森の「先住民」として名乗りを上げ、自

コンゴ盆地北西部に
広がる熱帯雨林



コンゴ盆地北東部イトウリの森でおこなわれている砂金採集



狩猟でとれる獣肉は
貴重なタンパク源であり、
数少ない現金収入源

特集
木

分たちの権利を求めて立ち上がった。これまで各地の森のなかで、狩猟と採集に依存しながら小さな居住単位にわかれて暮らしていた人びとが、共通のアイデンティティと権利の確立のために団結し、

より大きな社会集団として行動を起こしたのである。第二期国際先住民年の追い風をうけたこの運動が成功するかは、国際社会の支援と現地政府の理解にかかっている。